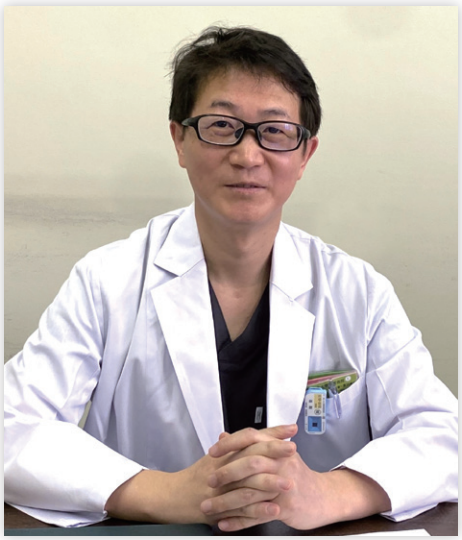
インタビュー

在日中国人医療者を訪ねて

人を助けるという原点から、医療と研究をつなぐ道へ

陳　昊　Hao Chen

横浜市立大学大学院医学研究科呼吸器病学教室 助教



2006.7　中国医科大学臨床医学（日本語クラス）卒業
2012.4　医師免許取得
2021.6　横浜市立大学院呼吸器病学卒業
2012.4　市立島田市民病院（初期研修、後期研修、呼吸器内科）
2018.4　横浜市立大学大学院（呼吸器病学，診療指導医）
2021.4　帝京大学附属病院（腫瘍内科，助教）
2023.4　横浜南共済病院（化学療法室，医長）
2026.4　現職

専門領域：腫瘍内科、呼吸器内科、総合内科

医学を志した原点と日本留学への道

「人を助ける仕事がしたい」という思いは、幼い頃から抱いていました。その気持ちが、医師という道を選ぶ原点になっています。命と真正面から向き合い、患者や家族の不安に寄り添う医療の仕事に強く惹かれ、中国で 6 年間の医学教育を修了した後、救急医療の現場に身を置きました。緊迫した医療現場で経験を積む中で、瞬時の判断力や、患者の命を守る責任感が培われていったと感じています。

学生時代には、日本のドラマ『東京ラブストーリー』や漫画『GTO』に親しみ、日本文化への関心を深めていました。そして 2011 年、「本当の日本を見てみたい」という思いから来日を決意しました。当初は米国留学という選択肢もあり、奨学金も獲得していました。しかし、一人っ子であることや親への負担、経済面などを考え、日本で学ぶ道を選びました。

来日後は呼吸器内科へ進みました。理由は、当時呼吸器内科の専門医が不足していたからです。自分が必要とされる場所で役に立ちたい――その思いが、現在の腫瘍内科分野へとつながっていきました。

日本の医療・研究に対するイメージと変化

来日前、日本の医療に対しては「高度で先進的」というイメージを抱いていました。しかし実際に現場に立って最も印象的だったのは、「診療の標準化」でした。どの医療機関でも大きな差がなく、一定の医療の質が保たれていて、ガイドラインに基づいた診療が徹底されており、患者はどこでも安心して治療を受けることができます。この医療品質の安定性こそが、日本医療の大きな強みだと感じました。

また、日本の医療現場で特に印象的だったのは「公平性」です。社会的地位に関係なく、患者は病状や緊急性によって判断されます。入院時の病室の割り当ても、基準となるのは患者の状態です。誰に対しても同じように診療を行う――それが当たり前に実

践されていることに、医療の本質を垣間見たような思いがしました。

日本で最初にぶつかった壁

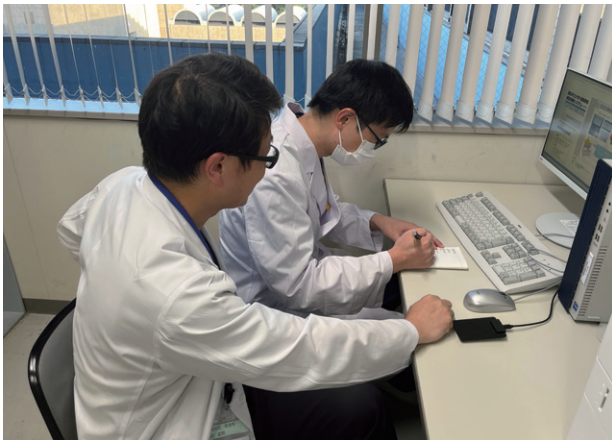
異国の地で医師として働き始めて、最初にぶつかった大きな壁は、やはり言葉でした。特に苦労したのは、患者が使う独特の表現です。例えば、症状を説明する際に、「チクチク痛む」「ズキズキする」といった擬音語・擬態語がよく使われます。こうした表現は、中国で日本語を学んでいた頃の教科書には出てこなかったため、最初は戸惑いました。医学用語には自信があっても、「日常の日本語」を正確に理解することは容易ではありませんでした。

しかし、周囲の医師や看護師の支えもあり、日々の診療を通じて少しずつ感覚を身につけていきました。2年目頃には、診療で困ることはほとんどなくなっていました。

日中の医療教育・研究教育の違い

教育面で印象的だったのは、先輩と後輩の関係性です。日本では、先輩が後輩を食事に誘い、気軽に交流する文化があります。食事の場で仕事や研究、将来について相談できることが、若手医師の成長にもつながっていると感じます。

一方、中国では上下関係への配慮がより強く、若手が先輩に気を遣う場面も少なくありません。もちろん、それぞれに異なる文化的背景がありますが、こうした違いを知ることが、より良い教育環境を考えるきっかけになると感じています。



若手研修医の指導にあたる

日中の若手医療者が協力できる分野

日中の若手医療者が協力できる分野として、国際共同研究は大きな可能性を秘めていると思います。中国には膨大な患者数と臨床データがあり、日本には緻密な研究デザインや基礎研究の蓄積があります。双方の強みを生かすことで、新たな治療法の開発や、質の高い研究成果につながる可能性があると考えています。

キャリアにおいて最も重要だった選択

キャリアの大きな転機となったのは、大学院への進学でした。臨床医として個々の患者を診るだけでなく、研究者としてデータ全体を俯瞰する視点を学びました。

「一人ひとりの症例が、未来の治療法につながっている」――その気づきによって、医療に対する考え方そのものが大きく変わりました。

忘れられない人や出来事

これまでのキャリアの中で、多くの指導医との出会いが自身を育ててくれました。特に、来日後最初

に指導を受けた島田市立総合医療センターの蔦野陽一先生の存在は非常に大きなものでした。

診療の基本からカルテの書き方、検査や処方の進め方まで、実践に即した内容を丁寧に指導してくださいました。夜遅くまで病院に残り、親のように若手医師を見守るその姿勢から、医師としての在り方を学びました。

誰かに教えてもらわなければ、医師は一人前にはなれません。自分自身も若手医師に対して同じように向き合うことを心掛けています。

自分を支えているもの

多忙な日々の中でも、自身を支えているのは「人を助けたい」という初心です。研究や診療で悩んだ時も、その原点に立ち返ることで、前に進む力を得てきました。

また、上司や同僚の理解、周囲のサポートも大きな支えになっています。業務調整をしてくれる環境があったからこそ、臨床に従事しながら研究活動も継続することができました。

家族の存在も大きな支えになっています。平日は診療、休日の一日は研究、もう一日は家族と過ごす時間に充て、子どもを連れて出かけたりしています。

「限られた時間を意識的に使い分け、断片化した時間も活用する」――それが現在の研究スタイルになっています。

将来の夢

現在は、臨床・研究に加え、中国医科大学日本校友会（同窓会）の活動や日中医学交流にも積極的に関わっています。日本で活動する中国出身の医療者のネットワークを通じて、日中医学交流の「橋渡し役」を担いたいと考えています。

COVID-19流行時には、中国医科大学日本校友会の仲間とともに、日本の診療手引きを中国語に翻訳し、中国の医療現場へ迅速に情報提供を行いました。

また、日本森林医学会の会長・代表理事である李卿（Li Qing）先生は、中国医科大学の先輩でもあります。そのご縁もあり、森林医学会については創設段階からお手伝いさせていただいています。

最近は、医療は病院の中だけで完結するものではないと、ますます感じるようになりました。薬や手術だけでなく、人間の生活環境そのものも健康に深く関わっている――その視点を大切にしています。

臨床医としての軸を持ちながら、医療と研究をつなぎ、人と人をつなぐ役割を担いたい。自分にできる「臨床以外のプラスアルファの価値」を探し続けていきたいと思っています。

若手医療者へのメッセージ

若い医療者には、ぜひ一度は海外留学してほしいと思います。異なる文化、異なる医療制度、異なる価値観に触れることで、自分の視野は大きく広がります。苦労もあると思いますが、それ以上に得られるものがあると確信しています。外から自分の国を見ることで、新しい気づきも生まれるはずです。



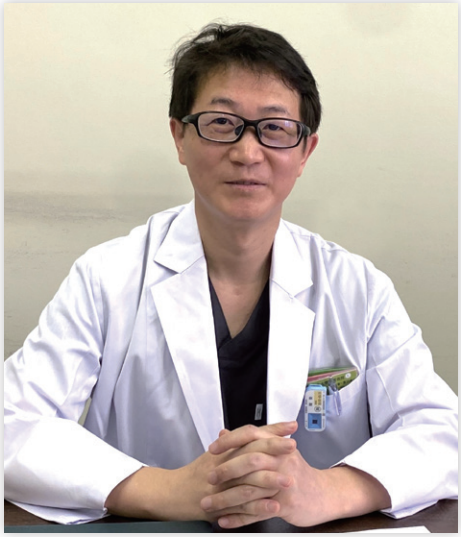
（聞き手・広報委員会専門委員　喬　炎）

由“助人”之初心，走向医疗与研究交汇之路

陈　昊 Hao Chen
横滨市立大学大学院医学研究科呼吸系统疾病学教研室 助教

2006 年 7 月　毕业于中国医科大学临床医学（日语班）
2012 年 4 月　取得医师执照
2021 年 6 月　毕业于横滨市立大学大学院呼吸系统疾病学
2012 年 4 月　市立岛田市民医院（初期研修、后期研修、呼吸内科）
2018 年 4 月　横滨市立大学大学院（呼吸系统疾病学、临床指导医师）
2021 年 4 月　帝京大学附属医院（肿瘤内科、助教）
2023 年 4 月　横滨南共济医院（化疗室、科长）
2026 年 4 月　现任职务

专业领域：肿瘤内科、呼吸内科、综合内科



医学之路的起点与赴日留学的契机

从小，我就一直怀揣着一个梦想，就是“想从事一份能帮助他人的工作”，而这份心愿正是我选择成为医生的原点。医疗工作需要直面生命，也需要关切患者及其家属的焦虑与不安，这深深吸引了我。在中国完成六年的医学教育后，我进入急诊医疗一线开始工作。在紧张的医疗现场不断积累经验的过程中，逐渐培养了瞬间判断能力以及守护患者生命的责任感。

学生时代，我喜欢看日本电视剧《东京爱情故事》和漫画《GTO》，对日本文化的兴趣也随之加深。于是，在 2011 年，我下定决心前往日本，希望亲眼看看真正的日本。当时我也曾考虑赴美留学，并且已经获得奖学金。然而，作为独生子女，我必须考虑父母的负担以及经济因素，最终选择了赴日深造。

来到日本后，我选择了呼吸内科，理由是当时该领域的专科医生十分短缺。我希望能在需要我的地方发挥作用，而这种想法也逐渐引导我走向了如今所从事的肿瘤内科领域。

对日本医疗与研究的印象及其变化

来日本之前，我对日本医疗的印象是“高端且先进”。然而，真正进入医疗现场后，给我留下最深刻印象的却是“诊疗的均质化”。无论在哪家医疗机构，医疗质量都保持在一定水准之上，差异并不大。基于指南的诊疗被严格贯彻执行，患者无论在哪里都能安心接受治疗。我认为，这种医疗品质的稳定性正是日本医疗的一大优势。

此外，日本医疗一线中尤其让我感受深刻的是“公平性”。无论患者的社会地位如何，都会按照病情和紧急程度来进行判断。住院时病房的安排也以患者的病情为依据。对任何人都一视同仁地进行诊疗——在这种理所当然的做事方式中，我洞见了医疗的本质。

在日本遇到的第一道难关

作为外国人最初在日本开始行医，首先遇到的最

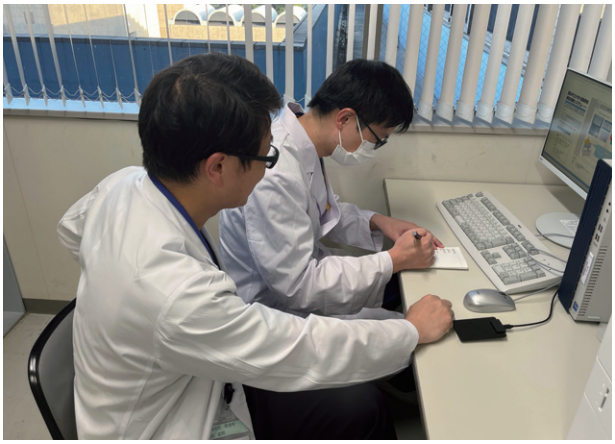
大障碍还是语言。尤其困难的是患者使用的独特表达方式。例如，在描述症状时，经常会使用“チクチク痛む（刺痛）”“ズキズキする（跳痛）”等拟声词、拟态词。这些表达，我过去在中国学习日语时的教材中从未遇到过，因此一开始时常常感到困惑。即便对医学术语很有信心，要准确理解“生活中的日语”也并非易事。

不过，在周围医生和护士的帮助下，通过每天的诊疗，我逐渐掌握了这些语言的感觉。到了第二年，诊疗中几乎已经不会再遇到语言方面的困难了。

中日两国医学临床教育与基础研究教育方面的差异

在教育方面，给我留下深刻印象的是前辈与后辈之间的关系。在日本，前辈常常会主动邀请后辈一起吃饭，通过轻松的交流增进彼此的了解。在这样的场合中，年轻医生可以就工作、研究以及未来发展向前辈请教。我认为这对年轻医生的成长有很大的帮助。

相较之下，在中国，更重视上下级关系，这种考量更为明显，年轻人需要顾及前辈的场面并不少见。当然，两国有着不同的文化背景，但了解这些差异，会成为思考如何营造更好的教育环境的契机。



指导年轻医生

两国年轻医疗从业者可以合作的领域

我认为，在两国年轻医疗从业者能够合作的领域中，合作研究蕴含着巨大的潜力。中国拥有庞大的患者数量和丰富的临床数据，而日本则在精密的研究设计和基础研究方面具有深厚的积累。若能发挥双方的优势，将有可能推动新疗法的开发，并产出高质量的研究成果。

职业生涯中最重要的选择

我职业生涯中最关键的转折点，是决定攻读研究生。使得我不仅仅是作为临床医生知道如何面对每一位具体的患者，还让作为一名研究者的我懂得了“从整体数据中俯瞰全局”的视角。

“每一位患者的病例，都有可能成为未来新疗法的线索”。这一认识，使我对医疗的看法发生了根本性的改变。

难以忘怀的人与经历

在我的职业生涯中，遇到的许多指导医生都对我产生了深远影响。其中，最初在岛田市立综合医疗中心认识的Tsutano Yoichi医生，对我而言意义尤为重大。

从诊疗的基本功、病历书写到检查与处方的流程，这些实践经验 Tsutano Yoichi 医生都以极其细致的方式手把手教导我。他常常工作到深夜，像父母一般默默守护着年轻医生的成长，从他的身上，我学到了作为一名医生应有的姿态。

医生若无人指导，便无法真正成长为独挡一面的专业人士。如今，我也努力以同样的态度对待其他年轻医生，希望将自己所受的恩惠传递下去。

我的支柱

在繁忙的日常中，支撑我的始终是那份“想要帮助他人”的初心。无论是在研究还是诊疗中遇到困惑时，只要想到这个初心，我就能重新获得前进的力量。

此外，上司与同事的理解，以及周围完善的支持体系，也给了我极大的帮助。正因为有能够协助调整工作的周边环境，我才能在从事临床工作的同时持续进行研究活动。

家人的存在同样是我重要的支柱。平日从事诊疗工作，周末的一天用于研究，另一天则留给家人，我常常会带孩子外出活动。

“有意识地分配有限的时间，并充分利用碎片化的时间”，这已经成为我现在的研究风格。

未来的梦想

目前，我在从事临床与研究工作的同时，还积极参与中国医科大学校友会的活动，并投身于中日医学交流。通过在日本工作的中国籍医疗从业者人脉网络，我希望能够成为推动中日医学交流的桥梁。

在新冠疫情流行期间，我与中国医科大学日本校友会的伙伴们一起，将日本的诊疗指南翻译成中文，及时向中国的医疗现场提供了信息。

此外，日本森林医学会的会长兼代表理事李卿教授也是中国医科大学的前辈。正因这份缘分，我从该学会创立阶段起便参与其中，协助开展相关工作。

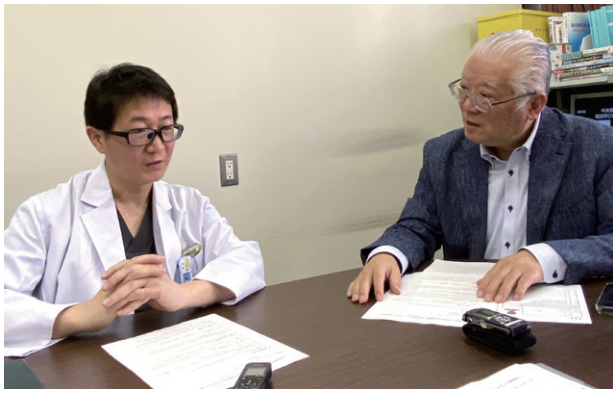
近年来，我愈发感受到，医疗并非只在医院内完成。除了药物和手术，人们的生活环境本身也与健康息息相关，我非常重视这种视角。

在从事临床医生本职工作的同时，我希望能够将医疗与研究融合，也连接起人与人。我将继续探索自己能够提供的“临床之外的附加价值”，不断向前。

给年轻医务人员的寄语

我希望年轻的医务人员能够至少拥有一次走出国门的经历。接触不同的文化、不同的医疗制度、不同的价值观，会让自己的视野大大拓宽。虽然这个过程中可能会遇到困难，但我深信，所得的收获远远超过付出的辛苦。

从外部视角重新审视自己的国家，也会带来全新的启发与思考。



（采访者／宣传委员会专业委员　乔　炎）